

創立70周年記念特集

今号では、横浜能楽連盟70周年を記念して、横浜
市文化観光局長、横浜能楽堂館長、そしてこれまで
連盟理事として貢献されてきた各流派の長老の方々
にコメントをいただきました。

創立70周年に寄せて

横浜市文化観光局長
池戸 淳子

このたびは、横浜能楽連盟創立70周年、おめでとうございます。また、平素から横浜市の能楽振興に多大なるご尽力を賜り厚く御礼申し上げます。今日に至るまで、歴代の連盟の皆様のお力によって、能楽の振興を脈々と支え続けてくださっていることに、心から感謝申し上げます。

横浜能楽連盟と横浜市との縁をたどりますと、昭和22年8月に誕生した、私どもの文化振興課のルーツである、民生局文化課にまで遡ります。戦後の焼け野原となった横浜で、市民による文化振興を目指した文化課は、昭和23年には、横浜能楽連盟の前身となる「横浜能楽謡曲連盟」創立の際に協力させていただきました。それ以来のお付き合いとなります。

私も、市民の皆様が自ら能楽を学び、広め、後世へ伝えていくことが、横浜の古典芸能

振興の中核をなしていると考えております。毎年、横浜能楽連盟が主催されている、能楽の各流派が一堂に会しての「五流能楽大会」や、「横浜能」は、横浜の古典芸能の振興にとって、大変重要な催しとして定着しています。

この催しが開催される横浜能楽堂は、本舞台が横浜市指定有形文化財となっており、平成8年に完成しました。その建設の際には、横浜能楽連盟の皆様が署名や募金活動の中心となり、1億円の寄付を集めていただきました。そのご助力に関しても非常に感謝いたしており、改めて御礼申し上げます。

今後は、ラグビーワールドカップ2019、東京2020オリンピック・パラリンピック開催により、横浜にも、外国人を含む大勢の方々の来訪が予想され、横浜は、世界的にも注目を集めていくこととなります。外国からの訪問者にとっては、能楽を含む日本文化は、大変に興味深いものと思われ、皆様の活動にも、これまで以上に関心が高まることを考えております。

他の都市に優った熱意

横浜能楽堂館長 中村 雅之

横浜能楽堂が開館してから数年、札幌・仙台など他の政令指定都市の職員が、度々視察に訪れていた。「市民から、横浜のように市立の能楽堂を建てるべきだ」という声が出ているので、調査しているところ」ということだった。

残念ながら、その後、札幌・仙台では市立の能楽堂建設の話は立ち消えになってしまった。横浜の後、政令指定都市では名古屋市能楽堂ができただけで、それ以降はどこも調査にさえ動いていないから、今後、もう政令指定都市で能楽堂を建設するところは無いかもしれない。これは、経済情勢の影響もあるが同時に、各地とも愛好者が減少

し、建設を求める声が萎んでしまったことも大きい。

そのような時代の流れを振り返ってみると、他に先んじて横浜に能楽堂を建設できたのは、単なる幸運ではなく、他の都市には無かった二つの大きな理由があったからだと考える。

一つは、維新後の能楽復興に多大な貢献をした旧加賀藩主・前田斉泰の隠居後の邸宅に、明治8（1875）年に建てられた由緒ある能舞台の解体後、観世流の田邊竹生先生を始めとした横浜の能楽関係者の尽力により、その部材が横浜で保管されていたこと。

もう一つは、横浜能楽連盟が中心となり、建設に向けて1億円の募金を集めたことだ。つまりは、能楽堂建設に向けての熱意が、他の都市に優っていたということだろう。

その礎となったのは、昭和28（1953）年から始まった、「横浜能」である。これは、全国的に見ても、薪能の先駆けとなった「京都薪能」と双璧をなす、戦後の能楽復興の足掛かりとなった催しである。

この歴史を大切にしていきたいと思う。

港まち文化交流拠点

観世流 藤本 圭佑

およそ160年前、開港当初の関内埋立地には、相生・高砂・住吉・常盤・尾上・羽衣・不老・翁・梅ヶ枝など、謡曲に因んだ雅名で彩られた「まちづくり」がすすめられた。明治23年には港まちを一望できる伊勢山皇大神宮に能楽堂ができ、観世・宝生・金剛・金春・喜多五流揃っての演能記録がある。そして、平成8年には紅葉ヶ丘に待望久しい能楽堂が完成し、全国に類を見ない港まちの文化拠点となった。暮れなずむ幽玄の街並みを歩くと、無意識に謡の一節を口ずさむ自分がいる。

能楽が海外に知られるようになったきっかけは、2001年に世界無形文化遺産登録されたこと、さらに2013年、霊峰富士山の世界遺産登録の推薦書に「羽衣伝説を基に謡曲羽衣ができた」との紹介があったことである。

いまや外国人観光客が2000万人を超え、2020年の東京オリンピック時には一挙に4000万人へと、日本には伝統文化と観光の平和な生活大国が

期待されている。一方、高齢化が進み、日本人の平均寿命は83歳と世界一になった。長洲一二元神奈川県知事は、著書「燈燈無塵」の中で、新しい時代にふさわしい価値観と生き方を一人ひとりが工夫して自分なりのライフスタイルを確立していく必要性を示唆しており、古典芸能「能楽」は、まさに趣味・教養として注目に値する。

横浜能楽連盟は今年創立70年、これまで「横浜能の共催」「五流能楽大会」の二大事業に平成10年には謡を始めて日の浅い愛好者も能楽堂を体験できる企画「五流交流のつどい」を加えて活動してきた。今後は、口コミはもとよりネットなどITも駆使して、大学を始め小中高の学生など若い世代や外国人愛好者へのアプローチを試み、よくはま港まちなかを、世界に誇れるこの伝統文化を次世代につなぐための新たな交流拠点としてはどうだろう。

連盟古希を祝って

宝生流 吉田 澄夫

私が横浜能楽連盟と関わりを持つようになったのは、新堀豊彦名誉会長との浅からぬ縁があったからである。宝生流教授嘱託会神奈川県支部の副支部長と

して（支部長は新堀氏）流派の雑務に追われていた私が、新堀氏に懇願されて理事に名を連ねたのは平成15年のこと。爾来平成26年に理事を辞するまでの11年間、能楽連盟にかかわってきた。後半4年ほどは新堀氏に「会長を藤本主祐氏（観世流）に引き継ぎ身を引くので、宝生流代表として支えて欲しい」とまたも懇願（？）され、結局副会長を引き受けることになってしまった。しかし、宝生流を優先せざるを得ない立場でもあったので、能楽連盟の役員としての仕事に十全の力を注いだとは言えず、若干忸怩たる思いが残るのが正直なところである。

その一方で、大鼓の稽古や離子謡に熱を上げていたこともあり、「五流能楽大会」など能楽連盟主催の会に宝生流として舞離子や独鼓など鳴り物入りの曲で数多く出演し、大会に彩りを添えられたのは幸せであった。

中でも、「第16回五流能楽大会」（平成12年）では海謡会の舞離子「胡蝶」（シテは岡幸男氏）を、離子方としてお手伝いしたこと（大鼓と笛が宝生の私と石田京氏、小鼓と太鼓が観世の広井徳平氏と井實昭子氏。舞台にかける前に、観世流若手プの指導を得ながら井實さんの自宅や街中の稽古場を借りて何

回も申し合せをした）、また「第22回能楽大会」（平成18年）では宝生流重鎮の渡井蘭子氏と観世流の井實氏（太鼓）にお願いして流派を越えた独鼓「遊行柳」を実現したことなど、懐かしい思い出も多い。

五流が揃った能楽連盟ならではの企画「五流競演」（新堀会長時代）、若い学生諸君に発表の場を提供する「特別招待出演」（藤本会長時代）、さらには広報・啓蒙活動の一環としての「連盟ホームページ開設」（現馬場会長）など、時流に沿った斬新な企画や試みに次々に取り組んでいる熱意を見聞するにつけ、横浜能楽連盟の未来は必ずや明るいものであると確信している。

総務会計として

観世流梅若会 安田 有子

もう半世紀近くも前のことになりましたが、観世流梅若会の謡をやっていた叔母夫婦から「謡がお上手で人柄も良く、素敵な先生がいるので、花嫁修業のつもりで通ってみたら？」と、堀内万紗子先生を紹介され、お稽古を始めました。まだ若く、正座が苦手だったので、仕舞から始めることにしました。いつも先生お手製のお菓子をご馳走し

ていただき、とても楽しくお稽古に通うことができました。

しばらくして、堀内先生が横浜能楽連盟の副会長に就任されました。男性ばかりの理事会の中で、とても頑張っておられたと思います。そして、27年間副会長を務められ、新堀元会長と共に勇退されました。

その際、「代わりに理事にならない？」と勧められ、少しパソコンができたため、新人のくせにいきなり総務会計補佐を仰せつかつてしまいました。小学校の作文しか書いたことがないのに、議事録まで書くことになりましたが、私の拙い原稿をキチンと校正してくださった主幹の倉藤さんには、大変ご迷惑をおかけしたと思います（現在はやつと議事録からは解放されました）。総会資料の作成も、大変な作業です。大枠は前回のコピーで済みますが、前年度との数字の違いなど、何回も見直しているにもかかわらず間違ってしまうのが、とても不思議です。会計も、始めは手書きの帳簿でした。倉藤さんが記帳し、年度末に2人で電卓を叩いて計算していましたが、読み上げ違いや打ち間違いばかりで大笑いの連続。2年目からはエクセルを導入して計算間違いは激減しましたが、相変わらず打ち間違い

はなくならず、苦労は続いています。素人の拙い作業ですが、会長始め理事の皆様方の的確なアドバイスにより、何とかこなせています。この歳になってもいろいろと勉強させていただいていることは、とても良かったと思っています。

紅葉坂あれこれ

喜多流 大館 惺雄

今から25年前、横浜能楽堂の起工式があり、私も出席させていただいた。横浜市長を始めとする関係者のほか、五流の職分の代表者も出席され、その方々による「高砂」「四海波」の合吟があった。その声の良さと高らかな響きは、まさに能楽堂の起工式にふさわしい堂々たるものであった。

それから3年、能楽堂が出来上がり、舞台披きの切符が売り出されたことを聞いた。起工式だけ出て、肝心の建物の中に入らないという手はないだろうと思い、切符を買いに行ったのだが、すでに長蛇の列が出来ており、並んでいた女性が「もう切符は買えませんよ」と教えてくれた。その時には、新しい能楽堂の建物の中にはもう入れないのか、という思いがした。しかしその後、能楽連盟に入

会し、理事としての関わりも持ったことで、会合や大会などで度々能楽堂を訪れることが出来るようになり、老高年の人生を楽しませてもらっている。音楽堂も含め、紅葉坂は、私の人生に彩りと大きな喜びを与えてくれている。

横浜風流に思う

金春流 水野 次郎

横浜能楽連盟創立70周年、おめでとうございます。創立された昭和23年と言えば、終戦からわずか3年という混乱期で、この年の11月には極東国際軍事裁判の最終判決が下され、終戦処理が緒についたばかり。このような折に、横浜で五流一派の能楽愛好者の手によって連盟が創立されたことは、大変意義のあることと受け止め、後輩の私どもは、これからの継承発展に力を尽くさなければならぬと思いました。

平成6年、私の地元である都筑区が港北区から分離誕生した際、記念行事の一つとして私の提案した「薪能」が採用され、初代区長・森茂さんの就任に花を添えることができました。その折に出会った二宮倫行さん（都筑の会）には今も時々お世話になっております。その後、

久良岐能舞台で守屋泰利師と出会い、本格的に能楽・謡曲を学ぶ機会を得ると同時に、伝統ある横浜能楽連盟の一員に加えていただきました。平成18年には金春流から理事に就任し、当時の新堀会長・藤本副会長を始め多くの先輩各位の薫陶を受けて勉強させていただきました。

おかげさまで、横浜と能楽の歴史、ことに江戸から明治にかけての町づくりで謡曲に因む町名が多いことなど、深い関係があることも知り、一層謡曲に力を入れることになりました。

また、各流派の勉強ぶりや活動は、毎年開かれる「五流能楽大会」と「五流交流のつどい」で知ることできますが、その準備段階での担当理事さんの活躍、そしてそれを統括調整して両舞台を支障なく運営されている理事会の存在は、もっと評価されてもよいと考えます。

また、貴重な舞台を守り運営されている横浜能楽堂に対して、感謝の一言に尽きます。創立20周年記念行事では、狂言大蔵流の山本東次郎師が「横浜風流」を創作・披露されました。これは「横浜市歌」と「大山・富士山の守り神」を大胆に謡い込んだ内容の秀作と思います。私は、この「横浜風流」をプレゼントとして活かし、我が横

浜を、世界に開かれた芸術文化都市として次世代にバトンタッチできればと思います。

横浜金剛会との関係

金剛流 桑 亮一

横浜金剛会は、昭和38年の石川島播磨重工業株（現在はIH I株）の横浜工場進出と共に磯子に転勤してきた、数名の同好者から始まりました。謡曲部として発足すると、次第に、数十名に上る勢いで増えていきました。その後、このIH I謡曲部以外にも団体として湘友会・田村会・純星会・発電技研ふれあい・豊藤会・久良岐会・美賀和会などが参加し、会員も一時は150名近くになったこともあり、最近では団体及び会員数も若干減少しましたが、それぞれ各師範のもとで謡・仕舞の稽古に励んでいます。

横浜金剛会での行事は年1回8月の最終日曜日に、横浜能楽堂で「謡曲と仕舞のつどい」として発表会を行っています。

横浜能楽連盟には、昭和62年に新堀元会長のお誘いで仲間入りさせていただきました。今年で31年になります。初代理事には故樋口寿男氏と望月悦夫氏の2名になってもらいました。新堀氏によりますと、シテ方の観

世・宝生・金春・喜多・金剛の五流が揃い、かつ観世流梅若会も一派として参加し、名実ともに五流合同の能ができるようになったのは、全国でも当連盟が最初であろうということで、大変喜んでいただいたことが記憶に残っています。

これまで「五流能楽大会」及び「五流交流のつどい」に毎年参加しておりますが、皆様には「舞金剛」の仕舞を多く見ていただけるように心掛けてまいりました。今後も続けていくつもりです。

今年、連盟にホームページを開かれたこと、おめでとうございます。これから大いに活用させていただきますと思います。

横浜能楽連盟に入会して

下懸宝生流 藤田 忠弘

下懸宝生流は、平成10年度に火謡会として横浜能楽連盟に入会しました。横浜五流能楽大会参加は第14回からで、この時は私の独吟「俊寛」でした。その後、峰謡会としても入会し、平成24年度の第15回五流交流のつどいに、連吟「頼政」で参加しました。横浜能楽堂の本舞台出演は、参加の会員にとっては大きな励みとなっています。

峰謡会は、2008年（平成

20年）2月に町内の同好会として発足し、現在は2つの教室で13人の会員が謡を楽しんでいます。自分の声に自信を持ち、自分の声を大切にしておおらかに力強く謡うことを一番の目的にしています。60歳、70歳から謡曲を始めた方ばかりですが、皆さんの熱心で真剣な取り組み姿勢に刺激されています。

峰謡会としての発表会は、毎年10月に磯子区久良岐公園にある久良岐能舞台で開催しています。今年で5回目となりますので、今回は参加者全員が役まはした独吟を務めることになっています。昨年から謡会終了後に隣接の和室にて懇親会を実施しています。

長年謡っていますが、ここ数年は声の出し方に難しさと楽しさを感じています。「玉鬘」の冒頭、ワキ「これは諸国一見の僧にて候」のクコはどのような謡うのか、謡う前に謡本をしつかりと読んで、玉鬘のワキの旅僧になりきると、謡える気持ちになれそうです。時に一曲を通して謡うことがあります。声次第に身体が芯から、そして体幹から生じてくるような感覚になることがあります。昨年の夏「半蔵」の冒頭ワキの「敬って申す立花供養のこと」を、都北山紫野雲林院の修行僧の心

づもりで謡っていると、自分が雲林院の僧堂の仏の前に座っているかのような感覚を覚えることがありました。今年も同じように謡ってみました。昨年の感覚が鮮明に蘇ってきて何か不思議な気持ちになりました。「半部」一曲の無本謡に再度挑戦中です。

面と私と能

面の会 岩崎 久人

私と能との縁は、1973年に当時の横浜能楽連盟副会長小久保謙一氏より、金春流の故桜間金太郎・守屋与四巳両先生を紹介されたことから始まった。長年横浜の金春流を支えてこられた守屋先生はもとより、お二人とも草創期から横浜能の重鎮であった。

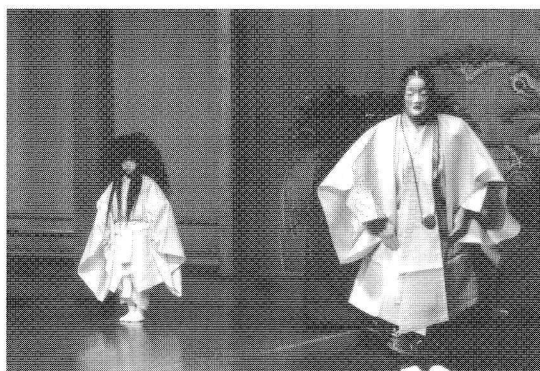
その頃私は貴金属加工の仕事をしており、趣味として木彫教室に通っていた。しかし、面打を習ったことはなく、独学で能面らしき物を作っていた。守屋先生や金太郎先生はそんな私の作品を見てくださり、やがて舞台で使っていたくようになった。今思うと、お二人の晩年20年程の能では、そのほとんどに私の打った面が使用された。

その後、守屋先生には謡と仕舞も習い始めた。そのうちに自

分の打った面で能を舞ってみたくなった。「羽衣」「弱法師」「角田川」の三番を東京目黒の舞台で舞ったことは、私の大きな財産となった。特に2003年に孫を子方として舞った「角田川」は忘れられない。奇しくも演能当日は3月15日、梅若丸の命日であった。

「角田川」孫を子方に舞う能の塚の柳のうすみどり 春まだ浅き 遠い思い出」：子方を務めた孫も今春、母親となった。

能面は、室町時代にはほとんどの種類が完成されていた。後に作られる面は家元や大名家に伝わるそうした面を写すことで流出していった。いわゆる「写シ」である(有名な面「雪の小面」などは何百面とある!)。「写シ」と称して「贋作」が通



用しているのは能・狂言面だけである。また、美術館や収集家、能楽師の家所蔵の面には、後世花押や焼き印が押され、高値で売買されるものも多い。

面を打ち、能を観る人生も40年以上となり、観能は数千番にも及ぼうか。各地に能面教室があるが、ほとんどが能には関心がなく、中には能を観たことのない人もいる。一般に能面は美術品と思われるが、本来の目的は、能に使用する道具でなければならぬ。であれば、能

能楽堂だより

30年10月～31年3月の公演案内

10月以降の横浜能楽堂の公演予定は、次の通りです。このほか、毎月第2日曜日に普及公演「横浜狂言堂」を開催いたします。

企画公演「風雅と無常―修羅能の世界」(全6回)

第2回「修羅能と狂言」

10月7日(日) 午前11時開演

語「那須」(大蔵流) 山本則俊

狂言「薩摩守」(大蔵流) 茂山七五三

狂言「通円」(和泉流) 野村万作

第3回「名器・青山」12月22日(土)午後2時開演

琵琶 秘曲「啄木」 豊靖秋

管弦 双調「陵王」 豊英秋ほか

能「経正 古式」(金剛流) 金剛龍謹

第4回「生田の梅」トーク 山口晃

31年1月20日(日) 午後2時開演

能「簞」(観世流) 梅若紀彰/美術 山口晃

第5回「無常」

31年2月16日(土) 午後1時開演

能「朝長」(観世流) 梅若実/間の熾法・相国寺

第6回「和歌の徳」披露 宮中披露会

31年3月23日(土) 午後2時開演

能「忠度」(観世流) 観世鏡之丞

第2回 S席四千五百円/A席三千五百円/B席三千円

を観なければ能面は打てないと思うのだが…。650年の能の歴史の中で私のような面打が自ら能を舞った記録が無いのと同様、不思議なことがこの世界には、ある。

第3回～第6回 S席七千円/A席六千円/B席五千円

チケット発売中

普及公演「眠くならず楽しめる能の名曲」

12月16日(日) 午後2時開演

狂言「仏師」(大蔵流) 善竹隆平

能「土蜘蛛」(観世流) 坂真太郎

替間「土隠」(大蔵流) 善竹隆司

S席四千円/A席三千五百円/B席三千円

チケット発売中

横浜能楽堂・伝統組踊保存会提携公演

「能の五番 朝薫の五番」

第5回「道成寺」と「執心鐘入」

31年2月9日(土) 午後2時開演

組踊「執心鐘入」佐辺良和

能「道成寺」(宝生流) 宝生和英

S席一万円/A席九千円/B席八千円

チケット発売：11月10日(土) 正午から

普及公演「バリアフリー能」

31年3月17日(日) 午後2時開演

狂言「附子」(和泉流) 三宅右近

能「大会」(宝生流) 大坪喜美雄

S席四千円/A席三千五百円/B席三千円

(介助者1名まで無料)

チケット発売：1月19日(土) 正午から